

本多辰次郎『北支満鮮旅行記』

高橋 勝 浩

はじめに

日本外交史の分野ではこれまで満州事変後の日中、日満関係について多くの研究業績が蓄積されてきた。とりわけ近年、飛躍的に進展したのは、満州国自体に内在する諸問題やアジア広域史⁽²⁾に視点を置いた分析である。しかし満州事変直後の満州国や中国の実態、さらには日満中三国の關係に対して、当時の日本の知識人が如何なる見解を持っていたかについては、必ずしも十分な考察がなされてきたとはいえない。

ここに紹介するのは、本多辰次郎（一八六八―一九三八）という明治時代後半から昭和戦前期の歴史学者が、昭和八年（一九三三）九月から十月の約一ヶ月間、中国・満州国・

朝鮮を旅行した時の日記、『北支満鮮旅行記』である。

本多は尾張国（愛知県）に生まれ、後に実家の七里家から本多正開の養子となる。彼は明治三十一年（一八九八）東京帝国大学文科大学国史科を卒業、同大学院に進んだ。明治三十六年山形県立山形中学校教諭心得、同校長を務め、同四十一年宮内省図書寮に転じ、その後同図書課長、同編修課長を歴任した。ついで大正十五年（一九二六）六月から昭和八年七月まで臨時帝室編修局御用掛として『明治天皇紀』の編修に従事、編修官長三上参次から厚く信頼されたといわれている。⁽³⁾大正十三年文学博士。著書に『勤王論之発達』（日本学術普及会、大正五年）⁽⁴⁾等がある。

『明治天皇紀』の編修事業が終了した昭和八年七月末を以て臨時帝室編修局御用掛を免ぜられた本多は、同年九月

から十月にかけて、華北・満州国・朝鮮を旅行した。主な旅程は次の通りである。

9月24日

東京発

29日～10月5日

華北（塘沽・天津・北平）

10月6日～14日

満州国（大連・旅順・撫順・奉天・新京・吉林）

朝鮮（平壤・京城・金剛・慶州）

15日～25日

朝鮮（平壤・京城・金剛・慶州）

28日

帰京

この時の日記が『北支満鮮旅行記』にはかならない。この旅行記は昭和十一年、東京の日満仏教協会本部から、協会パンフレットの第二輯（九二頁）として出版された。⁽⁵⁾

当時、この地方への旅行は必ずしも珍しいことではなかった。しかし個人の旅行記とはいえ、その内容は満州事変の余燼未だ冷めやらぬ中国華北地方、成立から一年半を迎えた満州国、日本統治下の朝鮮の状況、さらには当時の日満中間係や在留邦人の生活等を学術的分析も織り交ぜつつ、かなり率直に描写していて興味深く、公式文書には見えない当時の貴重な情報を提供している稀有な史料といえよう。

ところで、この旅行記の草稿本は京都府立総合資料館所蔵の『本多辰次郎文書』に収められている。草稿本は一冊で、本多用箋一四五枚にペン書きされ、厚紙の表紙を付し

て紙縫で仮綴したものである。外題はないが、本文冒頭には「北支満洲朝鮮旅行記」と記されている。記載期間は昭和八年九月二十四日から十月十四日までで、それ以後の記事はなく、散逸したと考えられる。なお、九月二十七日から十月四日、十日から十二日の部分等については別稿も一緒に綴じられているが、前記草稿との関係は判然としない。⁽⁶⁾

草稿本と出版本を比較すると、後者では読者の目や、三年という時間差から生ずる状況の変化、あるいは社会的な反響等を想定した文章の改変がまみえられる。そこで本稿では、草稿本と比較しつつ、出版本の主要部分を紹介してみたい。なお、史料引用に当たっては、漢字は人名を除いて新字体に改め、校訂注は〔 〕で、校注は（ ）で当該字の右側に、見消はとで当該字の左側にそれぞれ記し、現在不使用の呼称も原文のまま用いた。

一 旅行の経緯と中国入国まで

そもそも本多にとって、海外の土を踏むのは初めてのことであった。壮年時には欧米諸国への強い憧憬を抱いていた本多であったが、老年に及んで自らの専攻分野への裨益少ない欧米旅行よりも、文事視察を兼ねた中国華南地方の漫遊を望むに至った。昭和八年七月、官職を辞した彼にその機会がやって来たものの、結局、華南行きは断念せざる

二 中国

天津——排日感情への配慮——

を得なかった。それは折柄、「日支の国際円滑を欠き、南支地方は動もすれば危険の虞がある」⁽⁷⁾からであった。「之れに引換へて、北支地方は親日派の黄郛氏局に当り、一切心配なしとのこと」⁽⁸⁾であった。本多にとって「北支は支那文明発祥の地で、東洋文化の淵源を訊ねる便宜も此の地に存」⁽⁹⁾し、また「近時邦人は大いに満洲国に進出発展する実状にあるから、之れを視察するも亦無意味ならず」⁽¹⁰⁾、なお「朝鮮は我邦と古く緊密なる関係交渉があり、国史の研究には朝鮮視察の必要なること」⁽¹¹⁾と考えられたから、旅行先を華北・満洲国・朝鮮へと変更したのであった。旅行に当たっては、外務省文化事業部の後援を受ける予定となっていたが⁽¹²⁾、浄土真宗信徒でもあった本多は、大谷派本願寺総務総長阿部恵水の計らいで、現地駐在の布教師や別院輪番からの協力も得られることとなった。

こうして昭和八年九月二十二日、本多は家族とともに明治神宮に辞訣の参拝をなし、二十四日夜、夫人とともに東京駅を出発した。翌日京都東本願寺を参拝後、三ノ宮を経て神戸港を出帆した。二十六日船は門司港に一時停泊し、華北への輸出品（台湾産バナナ、リンゴ、石油等）を積載、その後朝鮮海峡の巨文島・濟州島等を尻目に黄海、渤海を経て、二十九日午後、塘沽に入港した。ここに、本多は中国の大地に足を踏み入れたのである。

塘沽について本多は、「明治三十三年北清事変に際して白石葭江中尉の先登徒歩して上陸し、殊勲を奏した所」⁽¹³⁾と記している。周囲の殺風景と埠頭に群がる中国人苦力など、本多にとって上陸の第一印象は不快そのものであったが、北清事変以来各国の警備地区となっている塘沽駅では「数人の日本兵士が警備に屯集して居るのを見て大いに人意を強うし、始めて愉快な思ひをした」⁽¹⁴⁾。彼は塘沽・天津間の警備担当のフランス兵が同乗する列車を利用、同夜、華北の玄関、天津に到着した。

日本租界・日本公園・天津神社など市内を一巡した本多は、天津について「一体近時は大いに排日抗日気分も緩和せられたが、併し猶幾分其の気分があり、又最近民国で関税を上げたのと、銀価暴騰で為替が変動したので、密輸入が夥しく増加し、正直な商人は頗る不利な立場に陥り、洵に市場は火の消えた様な光景であるとは、既に航海中の噂にも聞き、今又其の話に接した。我等は従前の事を知らないから比較は出来ないが、相応に繁昌し、市街も整然として善い都会である」⁽¹⁵⁾と記している。

ところで、草稿本には出版本にない排日感情についての左記記事が収められている。

是より先数日、日本兵士と支那兵と共に二三十人宛にて衝突し、発砲の末支那兵一名負傷せりといふ、事の起りは、日兵一人数日中に交替して帰朝すべきを祝して、酩酊の余り蹣跚として酒場より帰途、稍暴行を演じ、支那巡警が之れを引致し戒むる所あると、日本兵之れを聞き、三十名程直に押寄せ、引致せられし兵士を奪還す、是に於て支那兵等も馳せ集り争闘し、遂に発砲するに至りしなりと、事大体に関係なく、殊に近時北支の政権は親日家黄郛氏の掌握する処なれば、直に円満の解決を告げたと雖も、猶一部には人心何となく奚り居るとの説事に、支那町等には入らざるを可とすとの事なり、を聞いた。

確かに出版本も天津の排日感情に触れ、「後に聞いたが、かの岩佐忠哉氏が支那装をして支那街に入り込んだら乗せて居る車力が日本人か支那人かと聞く、虚言を言つても調べれば判知るから有体に日本人と答へると、巡警の許に連れて行かれた。ソーすると、衣服を脱せしめて身体検査を行つたが、別段怪しい品をも所持して居ないから、直ぐ許されて十分見物して来た。映画館でアメリカ製の排日映画を観覧したれば、日本兵士が上海あたりで、支那人を虐

殺して居る所を、米人が双眼鏡で遠方から凝視して居るなどいふ古いもので有つたが、ソナ物が大衆に受ける所を見ると矢張排日気分があるには相違ないと云ふ事であつた。夫を聞いて支那街に踏み込まなくて善かつたと思つた」と記している。しかし同じ部分を草稿本は「後に岩佐氏より聞く、曩に日支兵の闘争ありたる故にや、支那町に於ける排日気分は可なり盛にして、同氏は支那の服装して支那町に入りたるに、支人なりや日人なりやを誰何せられ、日人と答ふるや、裸体検査して携帯品等を検査せりと、且映画館に於て猛烈なる排日映画を観覧し来れり」と記していることから、出版本では中国の排日感情を必要以上に伝えまいとする本多の配慮を垣間見ることができよう。

翌三十日、本多は天津本願寺（明治三十六年八月創建の宗派不問の在留日本人葬祭所）、天津中日学院（旧天津同文書院）を相次いで参観。次に日本総領事栗原正から自動車と案内人の提供を受け、天津競馬場、東亜病院、フランス宣教師団経営の商工学校を歴訪した。

天津競馬場は同地海關稅務司であつたドイツ人デトリング（Gustaf Delling）によつて創始され、当時、東洋第一の規模を誇つていた。デトリングは日清戦争末期、清国政府の意を受けて両国講和のため訪日したものの、日本政府の拒絶に遭い、退去した人物であるが、天津在留外国人の先

駆的存在として感謝され、「徳大人」⁽¹⁷⁾とも称せられていた。

本多は「我等は当時来朝の無謀なるを嘲り、先の見えぬ毛唐人であると思つたが、何ぞ図らん識見高邁にして、度量寛宏、加ふるに雄偉にして先見の明あり、此の大規模の事業を創始し、後昆に追慕せらるゝと聞いて驚いた」⁽¹⁸⁾のであった。また商工学校においては、世界第一を誇称する華北の動植物・発掘品等のコレクションに驚嘆している。

本多は天津の各国租界巡視後、「英仏租界は道がに高樓軒を並べ、西洋都会の觀あり、日本租界も街幅広く、電車通じ、洋館も多けれども幾分見劣りのせらるゝのは遺憾である。猶一つ遺憾なるは英仏租界は知らず、日本租界に於ては大商店は大部分皆支那人の経営である。随つて財界の権は当然支那人が掌握して居て、日本人は中小商店で、売薬店が最も多い」⁽¹⁹⁾と、その様子を伝えている。

北平

十月一日本多は天津駅を發し、正午過ぎ北平に到着。當時の北平は天津に比べて在留邦人は少なく、九百人ほどであった。⁽²⁰⁾午後、まず紫禁城の西苑たる北海公園、ついで城外に出で、歴代皇帝が親しく天を祭つた天壇を見学した。翌二日、本多は日本公使館一等書記官中山詳一らに面会、自動車と案内役の供与を受けた。ついで対支文化事業部を

訪問し、書庫内の『宋拓法帖』『永樂大典』等の稀觀書を一覽、転じて北平第一の高所たる景山を経て紫禁城に至り、太和殿、保和殿、中和殿など城内を一巡した。なお、大倉喜七郎経営の大倉洋行、北平第一のデパートたる東安公司にも立ち寄つてゐる。

三日には燕京大学、西郊の万寿山、玉泉山、龍王廟、白雲館（道觀）を訪れている。燕京大学は北清事変賠償金還附の結果、英米宣教師団経営の三大学が合併して設立された。本多は「何時も学生等は排日抗日の運動に熱中するといふことであるが、目下は鳴りを静めて居る。設備は中々完備しているやうである。米人の支那懷柔に努めることは實に至れり尽せりである」⁽²¹⁾と記している。ついで万寿山では元代以降の歴代王朝によつて営まれた離宮等を一巡、「清朝末に女傑西太后が其の華寿祝賀記念として、海軍拡張費を割いて数寄を尽して修築したもので、費す所実に五千万元といふ」⁽²²⁾こと、また「光緒帝は此の山の登り口に在る宮殿の一室に幽閉せられたこともあり、李鴻章が勅許を乞はずして、此の離宮に入つたといふので罰せられたといふ」⁽²³⁾ことを聞き、「実に今昔の感に禁へぬ」⁽²⁴⁾ものがあつた。さらに本多は次のように述べている。

日清戦役当時清国水師提督丁汝昌定遠艦上乗を仰いで死せんとするに先だち、歎じて、若し太后にして万寿

山の修復を為さらずば今日の辱めは取らざりしもの
と言つたとの事である。成程初めの計劃では軍艦
でも定遠鎮遠級の戦艦が六隻出来る筈で、それに
応じた軍備拡張をする予定であつたのが、万寿山
の修理で、海軍費の大削減を蒙つたのであるから、
丁提督は愚痴をこぼしたであらう。併し物は見やう
で其の後張繼景氏はあの時悉皆海軍費に投じた
ならば、全部日本軍に撃滅せられたであらう、
万寿山を修理したので今に名所として残つて居
ると申したといふことである。⁽²⁵⁾

四日は中秋節で賑わう中山公園（清朝時代の社稷壇）を
一覽後、紫禁城を再訪、乾清宮・坤寧宮を見学、
また故宮博物院（午門）、雍和宮、孔子廟、
十方普樂寺、内城壁を巡覽した。故宮博物院
では大部分の展示物が南京に送られたものの、
展示場の関係から上海の倉庫に収蔵され、な
おかつ借款の抵当としてフランスの管理下
にあることを聞いた。華北を去るに際して、
本多は中国の対日感情について、「天津で日
支兵が衝突したり、其の支那街で排日映画を
興行したりして居るか思へば、又白雲觀に居
る番兵が我々に兵器を貸渡したりする。近頃
蔣介石は親日抗日二匹の馬を御してるとい
ふが、国民全般が無意識の間にそう成つて
るのではあるまいか。兎も角我等日本人と
は余程違つた所がある。到底其の目付きや顔
色では内心を読みにくい」とし⁽²⁶⁾

つつも、必要以上に彼らを嫌悪しないように戒
めていた。また、孔子廟や寺觀等の荒廢状況
から徳教・宗教いづれの衰頹も極度に達し、
だからといって、いわゆる三民主義なども容
易に一般に理解されず、「真に支那國民は舵を
失つた船の如く、行く方も知らぬ有様と想は
れる。併し漢人といふ人間は一般は兎も角時
に大偉人を出す歴史を持つて居るから、何と
か支那人に魂を入れる人物が出て来るであら
うかと思はれる」と、⁽²⁷⁾中国を思想的統一に導く人物の出現
をも予測している。

三 満州国

大連・旅順・撫順・奉天

十月五日日本多は北平駅を發した。山海關一帯が危険なため、京奉線は利用せず、天津・塘沽を経由、海路にて翌日大連に到着した。七日、本多は南満州鉄道株式会社に総裁林博太郎を表敬訪問、ついで満鉄図書館を巡覽、その設備と蔵書量に目を見張っている。さらに満鉄初代総裁後藤新平の命名にかかる星ヶ浦の景勝を満喫し、「星ヶ浦は実に日本的絶景である、此の景勝は日本に属して始めて其の所得た」と賞讃⁽²⁸⁾しているが、満鉄については次のようにも記している。

南満洲鉄道株式会社は此の地に君臨する王者である。万般の設備は皆満鉄の手に成つて居る。金融も教育も工業も商業も総て満鉄を離れては成り立たない。満洲の満鉄か満鉄の満洲か分らぬ状態である。併し此の王国でも張學良政權が隆々たりし頃は、日に月に其の勢威を縮められて光も薄らぎ、経営も困難を感じるに至り、社員等も皆何時帰国せねばならぬか知れぬと、密に其の準備と言へば大袈裟かも知れぬが、多少心懸けて居たもので有つたそう。

今や満洲国の独立と共に、面目を一新し、大連の繁栄は昔日に倍加し、王国は洋々たる前途を擁して、最も得意の体である。⁽²⁹⁾

八日は旅順博物館のほか、東鶏冠山・二百三高地等の日露戦争の戦跡を巡覧している。本多の感想に曰く、

旅順は関東庁の所在地であるが、今は所謂三位一体とやらで、関東長官は満洲軍司令官が兼任して、新京に駐在せらるゝから、旅順は政治軍事の中枢から遠く離れて、洵に静寂な土地で、氣候も温暖で、食物は魚類苹果共に美味で、海水は清く、港口は狭く殆ど庭前の池の観があるが、夫でも此処が日清日露の大戦場で、特に日露役に於ては、海陸共に我が忠勇なる将兵が勇奮国に尽した処で、あの狭い港口を閉塞せんが為に

廣瀨中佐や杉野曹長が死んだも此処、有馬、大角両大將等が閉塞船を沈め身を以て遁れたのも此処、又陸には二〇三高地など見た時は、乃木勝典・保典氏を初め戦死者を思ひ出したり、又水師營の乃木・ステツセル両將軍会見所には昔ながらの家屋棘樹などを見て感慨無量のものが有つた。実に懐しみのある場所である。⁽³⁰⁾

九日、露天掘りで有名な撫順炭坑を見学、またシエル・オイル製造所において従来廃棄されていた石炭外層の頁岩からの搾油工程を見て、「海軍省では戦艦運転の用に供する、国防上最も必要の品なりと喜んで居る。勿論我が国防に対しては、全部之に依ることは出来ないが、大いに助かることは慶賀すべき至りである」と喜んでゐる。⁽³¹⁾

十日奉天着。まず張學良から接收した関東軍野戦兵器廠造兵所を視察、ついで関東軍守備隊司令部(旧湯玉麟邸)において湯の発掘にかかる契丹道宗皇帝碑を見学している。ここで本多は満洲国博物館建設構想を紹介し、湯別邸を利用して羅振玉蒐集・寄贈の珍器・稀観書、記録類を中心に前記の契丹道宗皇帝碑、漢文碑、巨鐘等の満洲国の貴重品が展示される予定であり、支那時報社長水野梅暁、東京帝国大学名誉教授服部宇之吉、京都帝国大学名誉教授内藤虎次郎、濱田耕作・羽田亨の京都帝国大学教授、帝室博物館美術部長溝口禎次郎らがそのために渡満していると記す。

ちなみに、草稿本では「完成の上は或は我が帝室博物館よりも充実せる物となるやも知れず」と述べている。なお、この日は、匪賊の出没する東陵の見学を見合わせ、北陵、ラマ教寺院を巡視した。翌日も奉天において吉順百貨店、国立博物館、国立図書館文週閣（旧張學良邸）、満鉄図書館を歴訪、文週閣には『四庫全書』が完備所蔵されていると紹介している。

新京・吉林

十月十一日満洲国の首都新京着。十二日、日本の総領事館と大使館を敬訪問。大使館二等書記官林出賢次郎からは満蒙地方の諸種の有益な談話を聞いた。本多は翌十三日まで満州国文教部、大谷派本願寺別院、長春県立女子中学校、新京特別市第三小学校、郊外の中国人邸宅、執政府代行府中令内務部長寶熙（元清朝皇族）等を歴訪しているが、滞在中最大の出来事は、やはり国務総理鄭孝胥との会談であろう。本多は十二日、水野梅曉らとともに約一時間にわたって鄭に面会した。学者でもある鄭と文芸学術談議を交わしたいと考えていた本多に対して、鄭は意外にも熱心に政治談を試み、門外漢の本多も応答を余儀なくされた。その会話の一端を旅行記は次のように記す。

前政権は種々税政も有つた中に、紙幣を濫発して貨幣

に統制が無く、日々貨幣価値が変更して、何等標準価値が無い為に、士民就中商賈等の苦痛が甚大で有つたから、満洲国政府は王道政治の第一着手として、貨幣の統一を謀つた所、先づ今日では其の目的を達して、大いに人民に悦ばれて居るといふことである。そこで我等は従前は税則など一律せず、租税行政が紊れて居たとの風評を耳にした事があるが、其の方は如何なる様子かと尋ねたら、如何にも租税の方も統一を欠いて居た嫌が有つたが、此の方は中々一時に統一する運びには行かないで、国民も最も苦痛とする所の塩税の整理を第一に着手して居る、此の方はモー成功すること、信じて居る。問ふ、民族の融和は困難なるものと思はれる、満洲国は種々の民族の雑居であるから、定めて種々の困難も有らう。先づ第一に官吏が満日漢等の民族雑糅で、統御に困難は無いか。答ふ、宇佐美^{（勝夫）}総務庁顧問、遠藤^{（通也）}総務庁長、田邊^{（金通）}総長三巨頭が心を協せて、万事の締括りをして呉れるから、大いに安心して可なりとの事で有つた。

さらに鄭は「我々が標榜し実行して居る所の王道政治は、全く信教自由で、一宗一派に後援することは出来ない。併し王道政治は宗教を軽視しないのみならず、大いに必要と感じて居る、夫故在来の宗教も成るべく繁栄することを希

望するし、又日本あたりから新来の宗教も大いに発展して、宗教家から王道政治に助力して貰つて、相互扶助の出来ることを切望する⁽³³⁾と述べた。本多は、この旅行で謁見しなかった執政溥儀も、宗教的信仰を王道国家の基礎とすべきは康熙帝の遺詔と表明していると旅行記に記し、「この祖訓を遵守し、其の軫衷が施政の上に顕現するならば、王道政治は真に実現して、満洲帝国の前途は洋々として、万々歳を祝福すべきである⁽³⁴⁾」と述べている。そして、この旅行記の中で日本の各宗教の積極的進出が宗教のため、日満両国のため、東洋並びに世界平和のため必要と説き、真の意味の日満親善実現のため、宗教による相互の融合を訴えた。その後本多は、監察院長羅振玉、中央銀行総裁榮貢、文教部次長協和会理事許汝棠と会談した。羅と本多の話題は、前月に完成、昭和天皇に奉呈された『明治天皇紀』に及んだ。

羅氏、聞けば先生は明治大帝御紀編修に従事して居られたといふことであるが、最早完成したか、其の体裁は如何なるものか。

余、即ち既に完成して九月三十日に総裁より陛下の

(金子堅太郎)

御手許に奉呈したること、及び御紀の体裁は大体に於て編年体であるが、間々記事本末体を交へた所もある。其の体裁は期せずして朝鮮の李朝実録に稍似たる所が

あると答へ、そして文体は仮名交り文ではあるが、漢文直訳体を用ゐられたと付け加へた。⁽³⁵⁾

『明治天皇紀』については鄭との会談でも話題となったようであり、この日の鄭の日記には「文学博士本多辰次郎及其夫人来訪、水野为译员：本多修《明治实录》初成⁽³⁶⁾」とある。

本多は鄭と羅を「寛大の長者にして満洲国の柱石たるは両者共に一なりと感じた⁽³⁷⁾」と評し、草稿本でも鄭について「此の人ならば満洲国の発展を託し得べし」と賞讃している。

十四日、本多は当時の日本人から「満洲の京都⁽³⁸⁾」と呼ばれる吉林に赴いた。さまざま宗教施設が混在する吉林では臨済宗の北山寺（葉王廟）のみを参詣し、再び新京・奉天經由にて安東へと南下した。彼は華北南滿の旅行を終えるに当たり、「新京に心残りなのは余り押強く執政に面謁を求めるも如何と差控へて置いたが、之は失敗で却つて謁見して、建国の賀詞を陳べるのが宜ろしかつたといふ⁽³⁹⁾」と記し、さらに国都建設に邁進中の新京の発展が目覚ましいことに驚嘆している。

四 朝鮮より帰朝まで

十月十五日平壤に到着した本多は、正門に当たる大同門、

朝鮮出兵の講和談判地の練光亭、日清戦争の戦跡牡丹台付近、箕子陵を相次いで訪れた。翌十六日は京都帝国大学教授和辻哲郎とともに平壤博物館を観覧、ついで楽浪における京都帝国大学助教梅原末次の古墳発掘調査を見学後、夜半京城に到着した。京城には十八日まで滞在し、その間、京城博物館、徳寿宮、朝鮮神社、大韓国阿弥陀本願寺、東本願寺別院、春畝山博文寺、高野山別院、景福宮李王職雅楽師長咸和鎮、景福宮禁苑、經学院、明倫学院を歴訪している。

十九日本多は京城を発し、翌日金剛着。以後、二十三日京城に戻るまで内外金剛の景勝地を巡覧した。二十四日、京城の元朝鮮独立運動家申錫雨の邸宅等を訪問後、同地を発し、翌二十五日慶州に到着。慶州博物館（朝鮮総督府博物館慶州分館）に展示中の土器を見て、「従来信じて居る通り、任那・新羅は我国と同じく倭人が住して居たに相違ない」と一層確信するに至った⁽⁴⁰⁾。ついで仏国寺、石窟庵の大石仏、新羅太宗武烈王陵、蔚山籠城跡を歴訪、同日中に釜山に赴き、関釜連絡船の人となった。

二十六日下関に上陸した本多は安徳天皇阿弥陀寺陵、春帆楼、李鴻章遭難地を経て同地を出発し、翌二十七日京都東本願寺に赴き法主・総長以下に帰朝報告を行い、高尾・槇尾・梶尾、神護寺、大覚寺を巡覧した。かくして同夜京

都を発し、翌二十八日帰京した。

おわりに——満州国への期待——

本多はこの旅行記の巻末に感想を認めている。第一に本多の心頭に浮かんだのは「国家興亡の因⁽⁴¹⁾」であった。とりわけ君主国では、「宮中府中の関係⁽⁴²⁾」が最も重要であると記している。彼によれば、幾多の歴史が証明しているように、両者一体による意思疎通は必要であるが、それが極端になると独裁専制に陥るため、両者の均衡が必要なのであった。紫禁城は宮殿のみ独立したものにして、近くには府中というべき総理衙門やその他の官府は何一つなく、政治の実権は城内深宮に静居しており、これが清朝滅亡を招いたというのである。本多は「易姓革命を以て国体とする悲劇の跡を追憶回想して、暗涙を催さざるを得ざる次第である。之れに反して我等何の宿因有つてか、万世一系の国体を厳守して、天壤と与に無窮なる大日本帝国に生を受けたる、至幸至福に想到して、私かに又大に喜んだのである。併し又唯喜んだばかりでは足らない、此の国体を擁護し、長へに光輝あらしむることに努力せねばならぬと、つく／＼感ぜさせられ、心に誓つたことである。夫に就いても、宮中府中の関係を、明治天皇が適切に御定め下された立憲政体の樹立を深く喜ぶ次第である⁽⁴³⁾」と記している。

さらに記述は、日本・中国・朝鮮の民族と宗教の特長比較等から日本とその宗教の進出状況に及ぶ。中国政府の南京遷都、日中関係の悪化、銀貨高騰、関税引き上げ等によって日本人の華北発展は停顿・衰微の状態にあるが、その分、満州に幾数倍も発展し、日露戦争後三十年間、張作霖をはじめ中国人が持て余してきた満州は、日本の勢力が十分に及ぶと、時を経ずして面目を一新し、独立国家を建設した。この点からも、「一度び日本人の手にかゝると万事が浄化せられる⁽⁴⁴⁾」と彼は断言している。

しかしだからといって、旅行時点の昭和八年、日本の一部になお燻っていた満州併合論については、本多は草稿本において大義名分と利害の両面から誠めねばならない「謬見」であると批判した。すなわち、「従来満洲に君臨せし張作霖父子は漫りに搾取し、不換紙幣を発行して、私利のみ謀り、湯玉麟に至つては其の所行一層下劣にして、或は阿片製造に熱中して、商利を貪⁽⁴⁵⁾し、■名園寺觀を破毀し、穿⁽⁴⁶⁾取は益甚しく、民害を為し、民怨を招けるを以て、国民彼等を追慕する者無く、現時の王道政治を歎喜し、速かに旧来の悪政の改善を希望し居れども、一旦他国に併合となれば面子として、彼等は従順なる能はざる者族出すべし、然る時は義名彼に在り、統御の難き知るべきのみ」と述べているのである。

本多は天津在留日本人から満州国の前途に対する非常な悲観論を聞かや、「総じて在満日本人などにも悲観論多きは、是即ち我苗の碩なるを知る者なしとの理由だらうか⁽⁴⁵⁾」と慨嘆したものの、満州国視察の結果、かねての持論に確信を抱くに至り、満州移民についても悲観に及ばず、増殖する人口の移植策として必要との見解を表明している。最後に本多は古代から満州国の帝制成立に至る同地の歴史を略述した後、左記の和歌を以てこの旅行記の筆を置いている。当時の多くの日本人の心情を表しているといえよう。

満洲を如何なる国と人間は云にかくる、朝日と答へん⁽⁴⁶⁾

注

- (1) 山本有造編『満洲国』の研究』（京都大学人文科学研究所、平成五年）、塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』（吉川弘文館、平成十二年）等を参照。

- (2) 例えば、松浦正孝「二国史・二国間関係史からアジア広域史へ」（『国際政治』第一四六号、平成十八年所収）等がある。

- (3) 本多文之編輯・発行『かたみの花』、昭和十五年、七六七八頁。本多については伝記等の研究はなく、堀口修『明治天皇紀』編修と近現代の歴史学（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十三号、平成十八年十一月、所収）がわずかにその経歴を触れているに過ぎない。

(4)

その他、本多の主な著作として次のものがある。①『新編東洋史要』（野村浩一と共編、石田忠兵衛発行、明治三十四年）、②『帝国史要 中等教育』（野村浩一と共編、成美堂、明治三十五年）、③『近世高僧逸伝』（森江書店、明治三十九年）、④『大日本時代史 第十卷 維新史』（早稲田大学出版部、明治四十一年）、⑤『高山彦九郎と勤王論』（日本歴史地理学会編『新田氏郷土史論、仁友社、大正四年）、⑥『照国公御母堂賢章院夫人遺芳録』（猪谷宗五郎と共編、東京出版社、大正七年）、⑦『真宗開祖親鸞聖人』（国史講習会、大正十二年）、⑧『勤王思想の変遷』（林博太郎編『新しき愛国論、愛国社、大正十三年）、⑨『大正天皇を偲びまつりて』（東京市編『大正天皇奉悼講演集、東京市教育局、昭和二年）、⑩『勤王思想の發達』（日本学術普及会、昭和三年）、⑪『大日本史講座 第十六卷 日本思想史』（雄山閣、昭和四年）、⑫『明治天皇御事蹟の一斑』（『公余会講演集』第一輯、昭和七年）、⑬『皇室と仏教』（『東方書院編集・発行『日本宗教講座』二、昭和八年）、⑭『類聚伝記大日本史第二卷 将軍執政篇』（雄山閣編集・出版、昭和九年）、⑮『三種の神器』（東方書院編集・発行『日本宗教講座』三、昭和九年）、⑯『維新前後の宮中』（明治会講座部編『日本国体新講座』第一期第五号、師子王文庫、昭和十年）、⑰『御陵墓に就いて』（文明協会編集・発行『国史回顧叢書』第一冊、昭和十一年）、⑱『真宗の研究』（雄山閣、昭和十一年）、⑲『大日本国民史 第四卷 幕府新興時代』（太陽閣、昭和十二年）。

本多辰次郎『北支満鮮旅行記』、日滿仏教協会本部、昭和

(6)

和十一年（以下、本書引用の際は頁数のみ記す）。なお、本書以外の日滿仏教協会本部発行のパンフレットに、大谷瑩潤『仏教の国際化と満洲仏教政策』、大村桂蔵『満洲国の宗教教育』、都甲文雄『満洲宗教の概観』、濱田本悠『満洲国宗教視察記』がある。

(7)

京都府立総合資料館所蔵『本多辰次郎文書・乙』、一七六。なお、『本多文書』は全三二九点。本多が、『明治天皇紀』『皇統譜』等の編修に携わる中で執筆した原稿やメモ、収集資料、山陵に関する書留・資料、編集・編纂に関わる議事・規程類のほか、彼の著作の原稿・草稿などがある。

二頁。この部分について草稿本には「時は所謂非常時なり、日支の間国交円滑を欠き、南支地方は日本人に対して敵愾心を持し、動もすれば、難事を惹起する虞あり、さなくも希望の図書館・学校、或は寺観・等名勝・古跡等の観光視察を許されぬ事もあるべし、又彼国民に猜疑の眼を以て睥睨せられて不快を感じる場合なきを保せずとの説があり」云々とある。

(8)

二頁。

(9)

二頁。

(10)

二頁。草稿本はこの部分を「新興満洲国に至つては、其の地は古の扶余・高麗・渤海等にして、頗る国史に關係深く、且其の人民は漢人多しと雖も、満人に至つては近來の研究に徴せば、我が北鮮の民族と同一種なるを信ぜしむるに足り、今や我が民族の活躍地にして、帝国の生命線たり、之れを視察する豈一毫の益なしと言はんや」と記す。

(5)

- (11) 二頁。
 (12) 二頁。草稿本はこの部分を「文部・外務両省に於て対支文化事業に於て後援を約せらるゝなり、是与へらるゝあるを以て、忽ち北支・満・鮮の旅行を決意し」と記す。
 (13) 九頁。
 (14) 九頁。
 (15) 一〇〇一頁。
 (16) 一五〇一六頁。
 (17) 一三頁。なお、デトリングの訪日については、陸奥宗光著／中塚明校注『新訂蹇蹇録』、岩波書店、昭和五十八年、二〇二〇五頁を参照。
 (18) 一三頁。
 (19) 一四頁。草稿本はこの部分を「日本租界内と雖も、大商店は皆支那人の経営に有て商権全く彼等の手に在りといふ」と記す。
 (20) 一八頁。草稿本には「曩時は在留日本人は幾千とありしも、今や激減して日本人九百人、日本籍の朝鮮人三百人許のみ」とある。
 (21) 二五頁。草稿本は同大学について「常に排日運動の源泉なりといふ」と記している。
 (22) 二五頁。
 (23) 二六頁。草稿本には「皇帝は晩年康有為事件後、此の離宮内に幽囚の身となり、憂き年月を送られしは、其の室の前に立つて一欄の涙なき能はざるなり」とある。
 (24) 二六頁。
 (25) 二六〇二七頁。
 (26) 三四頁。

- (27) 三五頁。
 (28) 四一頁。
 (29) 四〇頁。
 (30) 四三頁。
 (31) 四四頁。
 (32) 五一〇五二頁。草稿本はこの部分について、鄭が租税不統一は「大問題にて一朝一夕に統一改善を為す能はず、租税中最も弊害あるは塩税なるを以て、第一之れを改善したるも他は漸を以て改めん」と説明したこと、また人種の融和統一については「目下の処一同協力して、国家の為に精進するを以て、不統一の事実を見ず、且宇佐美・田邊・遠藤の三総長能く万事の締め括をして呉れるから大に安心なり」と述べたことを記す。
 (33) 八二頁。
 (34) 八三頁。
 (35) 五三頁。なお康德四年（一九三七）、満州国国務院も『大清歴朝実録』全一二二〇冊を発行した。宮内庁書陵部（函架番号278-1）はそのオフセット版を所蔵している。
 (36) 中国历史博物馆编『郑孝胥日记』第五册、中华书局、一九九三年、二四八八頁。
 (37) 五三頁。なお、七五頁も参照。
 (38) 五七頁。
 (39) 五八頁。
 (40) 六七〇六八頁。
 (41) 六九頁。
 (42) 六九頁。
 (43) 七一頁。

(44) 七三頁。

(45) 一三頁。

(46) 九二頁。

〔付記〕『本多辰次郎文書』の複写並びに翻刻・掲載については、御遺族の濱田親子氏、京都府立総合資料館（歴史資料課辻真澄氏）の許諾を得た。未筆ながら感謝申し上げます。

（宮内庁書陵部編修課主任研究官）